1978年のデビュー以来、ママチャリ族の暮らしをがっちりサポートするロングセラーヒット商品

第20回

ユナイト

さすべえ

■商品プロフィール 製造は愛知県のユナイト。元社長の母親が、片手運転の自転車で転んでケガをしたのをきっかけに開発された、自転車用傘取り付け器。当初は雨の日需要を見込んだが、近年は日傘を取り付ける人が多い。したがって、春から夏にかけてが高需要期。関西、それも大阪、さらに南部での普及率が異常に高い。

【どこでもさすべえ(固定タイプ)】●標準価格/オープン●実売価格例/3300円●サイズ/全長約33cm●重量/約630g●取り付け可能なパイプサイズ/直径15〜24mm●取り付け用途/アウトドア用折りたたみイス、農機具、自転車、車椅子、ベビーカーなど

取材・文/宇野正樹

雑誌編集者を経てモノ系ライターとして、日々物欲の世界に身を浸す。最近、折りたたみ自転車の定番「BD-1」を購入、あちこちカスタマイズしながら街乗りにハマッている。さらなるカスタマイズに「さすべえ」いいかも。スポーツバイクをママチャリに一瞬で変身させる、必殺アイテムだ。

昔の「特選街」にも似たような商品が

手元に「特選街」の1980年11月号のトップ記事のコピーがある。それは「サイクルフレンド」という製品の紹介である。自転車に傘が取り付けられた写真が、ドーンと扉を飾っている。

おおっ、このころは、こんな地味なモノが目玉記事のアイテムとなりえたのか。今の本誌を知るものには、感慨を通り越して気が抜けるくらいの"暮らしの手帖"ぶりだ。いい時代だったのか。

しかし、これって「さすべえ」じゃないの? 写真を見れば、自転車に傘がくっついて、どこから見ても「さすべえ」である。

「ほぉ、初めて見るなぁ」

とおっしゃるのは、「さすべえ」を製造するユナイトの元・社長、荒川典和さん(66歳)だ。冒頭の記事コピーを荒川さんに見せたときの一言である。

すると荒川さん、棚からごそごそと1枚の新聞スクラップを出してきた。そこには〈雨降りの片手ハンドル追放〉という見出しで「さすべえ」の紹介記事が載っている。掲載年は1978年、当時の会社名は㈱アラカワといった。トヨタ自動車の部品を作っていたころの名称である。記事によると、今から28年も前に「さすべえ」は世に出ていたのだ。当時の価格は2980円だった。

そして、その1〜2年後には、先の「サイクルフレンド」という、非常によく似た商品が「特選街」に登場してくるわけである。同時期に同じようなことを考える人がいたのであろうか、それとも「さすべえ」のパクリだったのか。真偽を探るのが本欄のテーマではないので、それはさておく。

ともかく1970年代に、「さすべえ」が販売されていたことにアタシは驚く。『さすべえ』が関西ではやってきたのは、わりと最近のことだと思っていたからだ。

「作ってから最初の10年くらいは、まったく売れませんでした。おそらく、累計の生産量で1万個いかないくらいではないでしょうか。それが、1980年代半ばから大阪で急に売れ始めまして」

どうして、大阪で局地的に売れ始めたのでしょう?

↑傘を閉じるとこんな具合。大阪のスーパーの駐輪場に行くと、こんな自転車が何台も並んでいるらしい

↑傘を使わないときは、「しまってちょ」があればホレこのとおり、スマートに収納できますわよ、と筆者の妻(しつこい?)

↑日傘を付けてご満悦なのは筆者の配偶者(初登場)。女性には雨傘よりも、日傘需要が圧倒的に多い

↑「さすべえPART3」の部品。六角レンチが付属。20分もあれば取り付け完了

↑類似品と最も違うのが、この傘取り付け部。錆びない、割れないが自慢

↑標準タイプの「さすべえPART3」の取り付け部。一生外れないぞ! と主張

「いろんな説がありますけど、保険外交のおばちゃんたちが『さすべえ』付けて走り回ってくれたからとかね。ほとんど口コミ。大阪の人はカッコあまりつけんでね」

自転車のメーカー、部品工場、問屋などが集まる大阪

ちなみにユナイトは、愛知県清洲市に本拠を置く会社である。「さすべえ」は、いかにも大阪的な商品であるが、考案したのは名古屋人の荒川さんであった。

よくよく話を聞くと、大阪ではやったのは「最初、大阪の自転車問屋に持ち込んだからではないか」という。ものすごく単純な事実が出てきたのである。大阪は自転車メーカーや部品工場が集まり、その問屋も多い。自転車グッズを売るのに、大阪から攻めるのは王道なのである。

それに加えて、自転車普及率日本一という大阪の特殊事情がある。坂道が少ない大阪は、自転車乗りには優しい街なのだ。ちなみに、自転車普及率の全国最下位は長崎。むべなるかな。

「大阪の女の人は、デパートにも自転車で乗り着けますからね。三越の前にズラーッと自転車が並んでます。『さすべえ』付きの」(笑)

ある夏の日、アタシは阿倍野区の斜線沿いを歩いていた。そこを行き交うママチャリのほとんどに「さすべえ」が装着されていたことに驚愕したのである。同行の関西人にそのことを話すと「ああ、付いてまんな」の一言。彼らにとって、もうこれはあたりまえの光景なのだ。

そこで、「さすべえ」の普及率がもっとも高いと思われる、南大阪に住む知人にリサーチしてもらったところ、近所を走るママチャリの2台に1台は「さすべえ」が付いている模様——との報告。特に、南大阪、東大阪で普及率が高いようである。これが北大阪に行くとぐっと低くなり、京都や奈良ではほとんど見かけない状態になるらしい。

「大阪の自転車には『さすべえ』だけじゃなくて、ホントいろんなモノが付いていますよ。子供も前と後ろにきっちり乗せとるしね」

大阪、特に下町のオカンにとっては、見た目より実用が大事。う〜ん、3人乗りの「さすべえ」付き自転車をガシガシこぐ大阪のオカンの雄姿。話を聞くだけで、見たような気分に

大阪の土地柄や気質に合うんでしょうねぇ。保育園はもちろん、三越デパートの前にもさすべえ付きの自転車が並んでますよ。

←「さすべえ」でスピードを出すと、メリーポピンズのように空を飛びそうになる、なんてことはまったくなし。安全

↑荒川さんの自宅にある作業場兼研究室。日々、ここで「さすべえ」の改良と新製品の研究が行われているのである

↓数年前に考案されたクルマ用の「さすべえ」。屋根に吸盤で貼り付いて、雨の日の乗り降りを楽にする。吸盤に難点があり、実用化に至らず

なれる。

あまたのコピー商品とは一線を画す頑丈な作り

ところで、これまで「さすべえの普及率」などと書いてきたが、正確にいうと、「さすべえ及び類似品の普及率」が正しい。30年近くロングセラーを続ける「さすべえ」は、数多くの類似品を生んできた。

「うちの製品は、自動車のバンパーに使われているジュラコンという丈夫な樹脂を使っとるで、壊れたりはしません。よその安い製品は、売り場ですでにヒビが入っとるものもありますからね」

荒川さんをずっと悩ませているのが、そんなコピー商品の横行である。

「うちの商品が3980円で売られているその横に、1200円程度で類似品が置いてあったら、みんな安いほうを買うでしょう?」

でも「そんな商品は、冬場になるとすぐに割れる」。そしてまた安いモノを買ってきて付け替えるのである。ママチャリが1万円もしない現在、4000円近い「さすべえ」には割り高感があるのだろう。でも、安物買いのナントカにならぬよう、ここはアタシからも元祖「さすべえ」を強くオススメしたい。

「いちおう、3年保証を付けています。壊れたらすぐに修理をしますよ。そのときは保証書もいりません。でも、今まで、壊れた製品を送ってきた人はいませんねぇ」

「さすべえ」、自転車より頑丈かも。

そういうコピー商品のほとんどが中国で作られている。対して「さすべえ」は純国産品。すべて荒川さんが考案・設計をしてきた。部品はすべて外注。ユナイトでは組み立てと検査、梱包をするだけなので、社員は10人もいない。だが、今後、大阪だけでなくて関東圏でもブレークしたら、そんな規模ではやっていけなくなるのではなかろうか。

「いや、爆発的には売れんでええです。長いことやってきたんで、これからも、ずっとコンスタントに買ってもらえればいいんです」

荒川さんは、一線を退いた後、自宅の敷地内に作業場を自分で建てて、そこで陶芸をしたり、新製品のアイデアを練ったりする悠々自適の日々を送っている。

「私が『さすべえ』を作ったなんて、近所の人は誰も知りはせんでしょう」